

「唐織物」の受容と変様

河 上 繁 樹

はじめに

『広辞苑（第五版）』で「唐織物」と引くと、「唐織に同じ。」とある。そこで「唐織」という言葉をひくと、中国渡来の織物、また、それに似た織物の総称。唐織物。地組織は経の三枚綾、色系の絵緯は縫取織にして浮かし、多彩な美しい文様を織り出した絹の紋織物。能装束の一。唐織で詰袖に仕立てた最も豪華・華麗な表着。主として女役に用いられる。

（新村出編 岩波書店 一九九八年 五六四頁）

という三つの意味が記されている。このうち、「唐織物」は示されるように広義に中国製あるいは中国風の織物と捉えられている。

これに対して『日本国語大辞典（第二版）』で「唐織」をひくと、

公家の装束に用いる浮織物うきおりものに対する通称。唐織物。唐綾織。

中国渡来の織物。また、それを真似て織った織物。金欄、緞子どんす、繡珍しゅちん、繡子しゅすなどの類をいう。唐織物。からの地じ。能装束の一種。浮織物で仕立てた打掛うちかけの小袖。〔略〕唐織物。

（小学館国語辞典編集部編 小学館 二〇〇一年 第三卷一〇五五頁）
とあり、また「唐織物」の解説も「唐織」に対応しており、「唐織」と「唐織物」は同義に捉えられている。

『広辞苑』と『日本国語大辞典』では、それぞれと、とが共通するが、『広辞苑』が織物の特色を説明するのに対して、『日本国語大辞典』では「公家」という言葉から和風の織物がイメージされる。

次に『国史大辞典』はどうであるうか。「唐織」は①として「中世末から近世にかけて多く行われた、縫取り風の多彩な紋織物の一種。地織りは多く経の三枚綾地で地緯系の間に撚りのない多彩な絵緯糸を入れて一色ずつ部分的に文様を縫取って浮き織りにして行く。したがって外見は刺繍に似た様相を呈する。唐織という名称は外来の織物という意味であるが、わが国で平安時代から行われた二倍織物から発展したものといわれる。唐の字は、糸を浮かせた浮文の綾を唐綾などと称したのと同じく、絵緯を浮かせたところからつけられたものかも知れない。能装束や帯地などに多く用いられた。生産地は京都の西陣で、俗に西陣織というところこの唐織を指している場合が少なくない。（山辺知行）（『国史大辞典編集委員会編 吉川弘文館 一九八三年 第三卷六四〇頁』）とあり、『広辞苑』のに相当する説明が詳細になされている。また「唐織」の②として「能装束の一つ。錦に練糸や金糸などで花鳥その他種々の模様を浮織にした小袖仕立の衣服。中国風の織物に似せた意だが染織技術の高度化につれて絢爛華美をつくすに至り、能装束の中でも代表的なものとなる。（以下省略）（藤城継夫）（前同）」とあり、『広辞苑』と同様の意味が説明されている。いっぽう、「唐織物」については「唐土舶来の唐物とよぶ輸入品のうちの絹織物を総称する。普通には、室町時代に明国から舶来した金欄・銀欄・金緞・緞子・縐珍・綸子の類をいい、伝統の浮文の二陪織物を再現して華麗な文様を色緯で織り上げる国産の唐織と区別する。（以下省略）（鈴木敬三）（前同）と記され、『日本国語大辞典』と同様の説明がなされているが、「唐織物」と「国産の唐織」とが区別されている。

三者三様の解説に戸惑ってしまう。確かに歴史の文献史料中にあらわれる「唐織物」には中国からの舶来品という

広義の意味で用いられる場合もあるが、中世の史料では「唐織物」を『日本国語大辞典』にあるように公家を用いた浮織物として解釈したほうが良い場合もある。そして、その浮織物は『広辞苑』が示すような特色のある織り方であり、そのような織り方の「唐織物」が前提となつて、能装束の一種として「唐織」が成立したと考えたい。

本論では能装束の「唐織」の前身として国産の「唐織物」を想定し、わが国の歴史の中で「唐織物」がどのように受容され、如何なる過程を経て能装束の「唐織」へと変様したのかについて考察をおこなう。

第一章 公家が好んだ唐織物

わが国の絹織物は古来中国から大きな影響を受けてきた。平安時代の寛平六年（八九四）には遣唐使が廃止されて日中の公式な国交が絶たれたが、むしろその後、唐商船の来航は盛んになり、宋の時代（九六〇年）になるといっそう顕著になつて中国の文物がわが国へ流入した。清少納言が『枕草子』のなかで「めでたきもの」の筆頭に「からにしき」を挙げているように、中国から輸入される高級な絹織物が珍重された。平安時代に中国から輸入された高級絹織物は錦・綾・羅などであり、その頭に「唐」を付けて唐錦・唐綾・唐のうすものなどと呼ばれた。その中に『広辞苑』の「意味するような経三枚綾地に絵緯の縫取織で文様を織り出した織物が含まれていたかどうかは、同時代の遺品が現存しておらず確認できない。

しかし、文献の上では久安二、三年（一一四六、七）年ごろの成立とされる『類聚雑要抄』巻四の「三尺几帳一本」の項目に

〔前略〕但臨時ニ美麗ニ調時者。二倍織物。又浮線綾。象眼等。随_レ季被_レ用之。於_レ色者有_二時好_一。紐村濃又二倍織物。随_レ帷用之。

赤色唐織物。紐平絹定。但如_レ此物等。随_二夏冬_一用之。（以下略）

（『新校群書類従』第二十卷 名著普及会 一九七七年 五六五、六頁）

と記されており、「唐織物」と呼ばれる織物の存在が確認できる。『類聚雑要抄』は宮中や摂関家で行われた儀式の時の宴席や家具調度とその鋪設、装束などについての記録集であり、美麗几帳の用布として「二倍織物」や「浮線綾」とともに「唐織物」が記されている点に注目したい。「二倍織物」は地文のほかにさらに上文を織りだした浮織物であり、平安時代以来、公家の装束に用いられた和製の織物である。この二倍織物から上文を省き、地文だけを浮き織りにしたものが「浮線綾」であり、逆に地文を省き、上文だけを浮き織りにしたものが「唐織物」であったと考えられる。それは「唐織物」と呼ばれながらも国産の織物であった。

そのことを考える前に、「唐織物」と関連する中国の錦についてふれておきたい。その一例としてあげられるのが神護寺経々帙の錦である。この経帙は文治元年（一一八五）に後白河法皇が京都の神護寺に奉納した一切経を包むために調製された。当初は五〇〇枚あまりの経帙がつくられたが、その一部に「唐子唐草文様錦」（図1-1）が使わ



図1-1 唐子唐草文様錦 部分図
京都国立博物館蔵

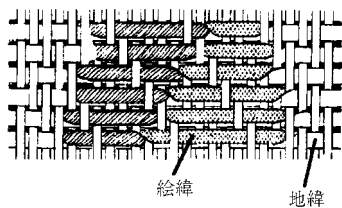


図1-2 同 組織図解

れている。この錦は、地を經の三枚綾で組織し、絵緯で文様を織りだしたもので、絵緯は地緯一越おき（全越_{まるこし}）に織幅いっぱいに通され、六枚綾の地裾で抑えられている（図1-2）。これと同様

の組織の織物は正倉院にも一例を見ることができ、この種の錦は綾織物の地に絵緯を加えて文様をあらわす新しい技術の織物であった。平安時代には宋からこの新種の織物が流入し、わが国でもその新技術に学びながら、貴族たちは自らの衣服にふさわしい織物をつくりだした。その一つが『広辞苑』と同様の織物であり、これを平安時代以来「唐織物」と呼んだと考えられる。

鎌倉時代の文献には、公家が自らの衣服に唐織物を用いた例が見いだせる。文永五年（一二六八）年に後深草院が舞楽を御覧になった時の記録である『文永五年院舞御覧記』には、公家の舞人の衣裳が記されており、例えば演目の「輪台^{りんたい}」では、「からをりの物さくらの狩衣 文桜」（実冬朝臣）、「唐織物のさくらの狩衣 文きょうよう」（冬輔朝臣）、「桜もえぎのからをり物狩衣 文桜」（公重）、「からをり物裏やまぶきの狩衣 文柳たすき。其あひに桜をむすびをく」（基俊）（『続群書類従』第十九輯 経済雑誌社 一九二二年 一五四―一五五頁）とあり、四人の公家たちはいずれも唐織物の狩衣を舞の衣裳にしている。実冬朝臣の狩衣は「さくら」の襲ねの色目で、かつ表地は桜の文様を織りだした唐織物であった。他の三人の狩衣もそれぞれに桜や杏葉、あるいは柳と桜を組み合わせた文様を織りだしている。

公家女性も唐織物を用いた。『妙槐記』文応元年（一二六〇）四月二十四日条によれば、大宮院（後嵯峨天皇の後）が賀茂祭見物に御幸した際の装束として、「大宮女院御料菖蒲二生唐織物、竹文、御衣」（『増補史料大成』三三三 臨川書店 一九六五年 一九八頁）とあり、季節にあわせた「菖蒲」の襲ねの色目で竹の文様を織りだした生絹^{すずし}の唐織物を二衣^{ふたしし}にして着用した。あるいは高貴な婦人が社寺へ奉納した御衣にも唐織物の例がある。『昭訓門院御産愚記』乾元二年（一三〇三）五月九日条によれば、石清水八幡宮へ「唐織物藤二御衣。文藤・橘等。即女院御服也。」、上賀茂神社へ「唐織物藤二御衣。文藤。自永福門院被進之。」（史料纂集『公衡公記第三』続群書類従完成会 一九七四年 一一〇―一一二頁）など見え、昭訓門院（龜山天皇の妃）や永福門院（伏見院の後）が唐織物の御衣を神社に調

進している。

因みに、嘉元二年（一一三〇四）三月制符口宣には「唐織物・二倍織物、雖 院宮不可被用之。」とあり、二倍織物とともに唐織物が院宮の奢侈禁制の対象にあがっており、贅沢な織物であったことがわかる。

以上の例にあげた衣服は、襲ねの色目や文様が日本的なものであり、これらの唐織物は和様化した文様を織りだした国産の唐織物であったと考えられる。『明月記』寛喜元年（一一三九）十二月二十九日条に「京中織手織出唐綾也」（国書刊行会 一九七〇年 一五丁一五三頁）との記述があり、京都で「唐綾」が織られていた。同様に「唐織物」が織られていてもおかしくはない。

第二章 古神宝の唐織物

文献の上で散見する唐織物ではあるが、平安時代から室町時代の公家が実際に着用した装束の遺品は現存していない。しかし、公家装束の制に倣った神宝の装束をみると、二倍織物・唐織物・浮織物・固織物・固地綾など各種の織物はいずれも経三枚綾組織を基本にしている。

現存する唐織物の最古例は鶴岡八幡宮（鎌倉）の神宝装束に含まれる唐織物である。鶴岡八幡宮の神宝装束は後白河法皇（一一二七～九二）の寄進とも亀山上皇（一二四九～一三〇五）の寄進とも伝え、正確な製作年代は不明ながら、鎌倉時代の遺品とみなされている。その桂に用いられた向鶴三盛丸文の唐織物は、地が経三枚綾組織で地文はなく、向鶴の三盛文が絵緯で縫い取られており、この絵緯は全幅に通らずに文様部分だけを往復し、各文様ごとに色を替えている。これは『広辞苑』で意味する「唐織」と同様の組織であり（図2）、『日本国語大辞典』でいうところの「公家の装束に用いる浮織物」である。

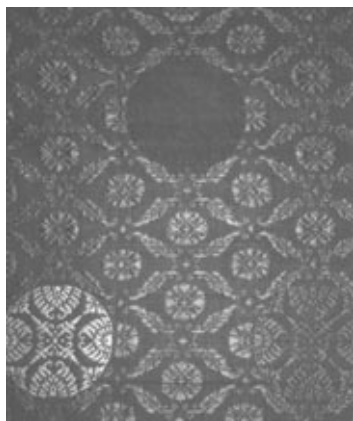


図 3-1 二倍織物 部分図
熊野速玉大社蔵

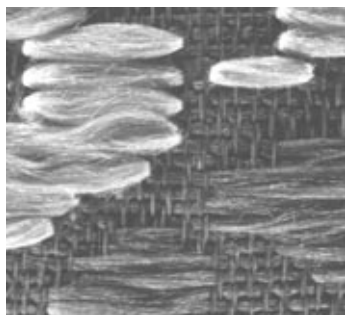


図 3-2 同 組織拡大図

この表地はいわゆる二倍織物である（図 3 1）。二倍織物は地文の他に、さらに別の上文を織りだした織物で、組織は地経三枚綾、地文は地緯を浮織とし、上文は絵緯を加えて上文の文様部分だけを縫取織にするのが通例である（図 3 2）。二倍織物の呼称はこのように地

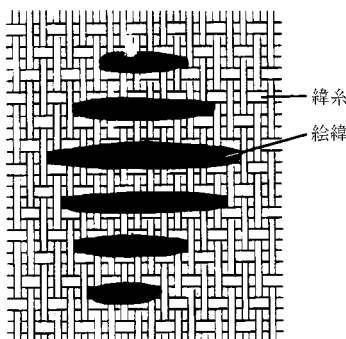


図 2 唐織物 組織図解

さらに、熊野速玉大社古神宝類の場合は、遺品と記録が一致し、当時どういうものを指して「唐織物」と呼んだかがわかる。熊野速玉大社の古神宝類は明徳元年（一三九〇）に禁裏・仙洞・幕府（足利義満）・諸国守護職によって調進された。『熊野新宮御神宝目録』（熊野速玉大社所蔵）はその時の目録（但し、原本は失われ、江戸時代の写本が残るのみ）であり、天照大神を祀った「若宮」には公家女性の制に倣った御神服が調進されたことがわかる。その項目に、「御薄衣一領 萌黄諸色唐織物上丸文地小葵浮線綾 裏萌黄遠菱平綾」と記されている。薄衣は公家女性が用いる袷の一種であり、萌黄色の地に上文として諸色（さまざまな色）の丸文を唐織物の技法で織りだし、地文は小葵を浮線綾（浮織の綾）として、さらに裏地は菱文を間遠に配した萌黄の綾を用いたものと解釈できる。これに相当する遺品が同社に伝来している。この表地はいわゆる二倍織物である（図 3 1）。二倍織物は地文の他に、さらに別の上文を織りだした織物で、組織は地経三枚綾、地文は地緯を浮織とし、上文は絵緯を加えて上文の文様部分だけを縫取織にするのが通例である（図 3 2）。二倍織物の呼称はこのように地

文の上にさらに上文が加えられていることによるのであるが、この上文部分の組織だけを見ると、唐織物と同一の組織であり、『熊野新宮御神宝目録』でこの上文部分を指して「唐織物」と呼んだことが理解できる。

唐織物は二倍織物の地文を省いたものであるから、技術的には二倍織物が製織できれば、唐織物も問題なく織ることができた。平安時代に二倍織物が織られていたなら、唐織物も織られていたはずである。そして、鎌倉時代に和様化した文様の唐織物が存在していたことは文献史料が示すとおりである。唐織物の「唐」はすでに中国製あるいは中国風という意味から離れ、平安時代以来貴族のあいだで好まれた織物の伝統をひく高貴な織物というイメージへ転換していったのである。

第三章 武家を取り入れた唐織物

鎌倉時代以来、政権の座についた武家は、公家とは一線を画す服飾文化を創りだした。しかし、上流武家の服飾は公家に範をとる一面を見せ、高貴な唐織物で小袖を仕立てることがあった。

唐織物が小袖に用いられた例としては、『満濟准后日記』永享六年（一四三四）八月二十七日条に將軍足利義教の夫人に贈られた引出物に「此時御引物。略 御臺様 御小袖二重唐織物。……」（『続群書類従』補遺二 一九二八年 六〇五頁）とあり、あるいは『看聞御記』永享十年（一四三八）四月二十六日条に「上様へ被進物。小袖十重唐織物二重八替もろあを。……」（『続群書類従』補遺四 一九三〇年 五四〇頁）と見え、義教の愛妾である上様へ唐織物の小袖が贈られた。これらの記録には唐織物とは別に金襴・緞子などの中国渡来の織物が併記されているから、ここで言う唐織物は広義に中国渡来の織物という意味ではなく、むしろ特定の織物を指すものと考えられる。

武家が小袖に唐織物を取り入れる前提には、伝統的な公家装束があった。『永享九年十月二十一日行幸記』によれ

ば、永享九年（一二三七）十月に後花園天皇が足利義教の室町殿へ行幸した際の義教夫人の衣裳は、

一、略 御臺の御服紅葉重の七御ぞ。上地黄なる唐織物、御紋紅葉のちり葉。御小褂唐織物、御地うす色、御紋
碁盤に菊。御唐衣赤色、桐唐草をうき織同御紋ぬひ物。うき織ものゝ御小袖、御紋龜の甲たすきにひあふきひ
しと龍膽に雪との十六かわり。紅の生衣御袴也。

（『新校群書類従』第二巻 名著普及会 一九七八年 四五六頁）

とあり、行幸の場では武家の義教夫人も公家のスタイルを装っている。これを順にみると、御衣は紅葉重ねの色目で、重ねの一番上の衣は紅葉の散り葉をデザインした黄色の唐織物、さらにその上に重ねた小褂は碁盤に菊文様をあらわした薄色の唐織物であり、時節に応じた重ねの色目と文様の服が選ばれた。そして最も上には桐唐草文様を浮織物と刺繍であらわした赤色の唐衣を着た。また、肌近くには亀甲・檜扇・菱と龍胆に雪の文様を十六替わりの段替にした小袖を着け、紅の袴をはいている。

故実を重んじる公家装束からすれば、義教夫人の着用した御衣や小褂の唐織物が新来の中国渡りの織物を採用したものと考える難い。そして、これら唐織物に織りだされた碁盤に菊や紅葉の散り葉の文様は和風の意匠であったといえよう。

このように晴れ場で用いられた唐織物は武家のあいだで特権的な織物として扱われるようになっていく。文明十四年（一二四八）奥書の『御供古実』には

一、唐織物之事。一段御賞翫之儀二候。尋常の人のめし候はんずる事にてハ候はず候。からをり物をおとこ衆の著用の事ハ、三管領へ御成の時、御拝領之外ハ無_レ之候。然共又一段の後に被_レ下候事も可_レ在_レ之。
一、唐織物めし候はんずる人の位ハ、三管領の御母、又八日野殿、三条殿の女中杯の御事たるべし。是も御免と被_二仰出_一候てめされ候。

（『新校群書類従』第一七巻 名著普及会 一九七七年 六五五～六五六頁）
とあり、大永八年（一五二八）奥書の『宗五大艸紙』にも

一、公方様御服と申八、略 又から織物八、一段御賞翫の儀に候。公方様の外、御台様、日野殿、三条殿、女中
管領の御母御免候てめし候。又三職は拝領にてめし候。

（『新校群書類従』第一八巻 名著普及会 一九七七年 一二二頁）
と記されている。武家のあいだでは、將軍をはじめとする上層階級の限られた人びと、あるいは拝領の場合にか、唐織物の着用が許されなかった。つまり、唐織物は武家にとってステータス・シンボルであったといえよう。

第四章 能装束の「唐織」の成立

能楽は室町時代に世阿弥（一三六三―一四四三）によって大成された。世阿弥は、物まねの能から脱却して、象徴的・普遍的な人物表現をめざす夢幻能を創作し、夢とつつが交錯する幻想的な劇、幽玄の世界を表現しようとした。しかし、扮装が外面的なものから象徴なものへと変化し、写実を排した能独自の様式が形成されるようになるには今しばらく時間を要した。

世阿弥の時代は、まだ物まねの能が主流をなしていた。世阿弥も『風姿花伝』において、女の物まねは「女御・更衣などの似せ事は、たやすくその振舞を見る事なければ、よくよく伺ふべし。衣・袴の着様、すべて、私ならず。尋ぬべし。ただ、世の常の女かかりは、常に見馴る事なれば、げにはたやすかるべし。ただ、衣小袖の出立は、大方の體、よしよしとあるまでなり。」（岩波文庫 岩波書店 一九五八年 二四・五頁）と述べている。ふつうの女は衣小袖の出立でよいが、女御・更衣など身分の高い女は衣袴の姿で、その着方もよく尋ねて身分にふさわしい扮装をす

ることが肝要と説く。ここでは身分に応じた実際的な服装が選ばれた。

こうした衣裳の一部は、演能の際に見物人から、小袖脱ぎ、素襖脱ぎと称し、演技者に対する褒賞として与えられ、さらにそれが能の装束に転用されてゆく。寛正四年（一四六三）の『紵河原勸進猿楽日記』には「一、能果テ則還御成頭。〔略〕御服面々御供衆以下。御内者悉小袖又ギアリ。御服小袖都合八十三有之。」（『新校群書類従』第一五巻 名著普及会 一九七七年 八一頁）とあり、初日の終演後に多くの御服・小袖が座員たちに与えられた。この時、三日間連続して行われた演能で小袖脱ぎによって与えられた衣服は三七領にものぼった。小袖脱ぎ・素襖脱ぎは次第に定例化し、年頭などに將軍家から能役者に対して唐織物などの高級な小袖が下賜された。『年中定例記』には「一、御台様より、はやし物前に觀世大夫をめされて、から織物已下御ふく十被_レ下候。勢州取次申て被_レ下候。御ひろぶたにす八る。御小袖計也。」（『新校群書類従』第一七巻 名著普及会 一九七七 五五八頁）とみえ、唐織物などの高級な小袖が將軍夫人より觀世大夫に与えられた。このようにして拝領した小袖はもっぱら演能のときの装束として用いられたと考えられる。

唐織物が能装束に用いられた例は、金春禪鳳（一四五四―一五三三？）の芸談を伝えた『禪鳳雜談』に「一、晷_{せう}の能は、左阿弥作候。宗_{そう}_{いん}、たうのみねにて、うつせみ、からおり物にて、花ぼうしにて出られ候。まことのうつせみもかくやと思やられ候。」（『金春古伝書集成』わんや書店 一九六九年 四六八頁）とあり、禪鳳の父宗_{そう}_{いん}（一四三二―一八〇）が奈良多武峰の談山神社で、源氏物語に取材した「晷」という女能（廢曲）を舞った時、シテの空蟬の出立に唐織物を用いたと伝えている。また、同じく『禪鳳雜談』に「略 此春大内殿にてう月と六浦と仕候が、出立、はだにねりに、べにいらすのからおり物ばかりにて仕候へば、出立面白き由被仰候。」（前掲『金春古伝書集成』四七五頁）とあり、大内義興邸（大内義興が在京したのは一五〇八年から一五一七年まで）において「雨月」と「六浦」とが舞われた際の出立に紅入らずの唐織物が用いられた。さらに、禪鳳は晩年の『反古裏_{ほこり}の書』において「つか

いの女房などは、ねりをも、はくゑなどの小袖よし。おり物、からおりなど似合わず。人につかわるゝ女、同前」(前掲『金春古伝書集成』三三三頁)と述べ、能の場合においても使いの女房のような身分の低い役柄には織物や唐織がふさわしくないと指摘している。逆に言えば「唐織」は高貴な女性の役に適した装束であった。

禅鳳の記述でもう一つ注目されることは、『禅鳳雜談』で「唐織物」と言っていたものが、『反古裏の書』では「唐織」となっている点である。禅鳳の記述からすると、空蟬の扮装に用いた「唐織物」と、使いの女房にはふさわしくない「唐織」が全く別種の装束であったとは思えない。むしろ、「唐織物」と「唐織」とは同種の装束であったと判断できる。『禅鳳雜談』は藤右衛門という人物が永正十年(一五二三)前後に見聞した禅鳳の芸談を記録した書、『反古裏の書』は成立年次が不明ながら永正以後とされることから、十六世紀前半にはそれまで「唐織物」と呼ばれていた織物が次第に「唐織」という言い方に变化していったのではないかと推測される。

桃山時代の型付を示す慶長元年(一五九六)奥書の『童舞抄』では七十曲のうち八曲に「唐織」の語がみえ、うち「通盛」「籠太鼓」「玉鬘」の三曲では唐織を用いないように指示しているが、残る五曲の「うのは」「湯谷」「野宮」「芭蕉」「定家」では、例えば「湯谷」に「小袖。唐織・ぬいはくえらばず」(法政大学能楽研究所編 能楽資料集成1『下間少進集』わんや書店 一九七三年 六二頁)とあるように、唐織と繡箔との区別がなく用いられた。同様に『少進能伝書』(法政大学能楽研究所編 能楽資料集成3『下間少進集』わんや書店 一九七四年)では五十三曲のうち、「うのは」「朝長」「龍田」「江口」「源氏供養」「船弁慶」「葵上」「井筒」「二人閑」「熊野」「千手」「鴨」「殺生石」の十三曲で「唐織・ぬいはく不_レ撰」とされ、唐織と繡箔が同格に扱われている。この時点では江戸時代のように唐織は表着、繡箔は腰巻というような用途上の規定がなく、両者はともに「結構なる小袖」として優雅、艶麗な幽玄美を演出するのにふさわしい装束と認識されていた。かつて世阿弥が「衣袴」と述べた女御・更衣の扮装も、天正期後半ころの刊行とされる『八帖花伝書』では「表着は唐織を本とせり」(日本思想体系二二『古代

中世芸術論 岩波書店 一九七三年 五八五頁）といわれるまでに変化し、桃山時代には能装束の一種として「唐織」が成立した。

第五章 桃山時代の唐織

桃山時代の天下人豊臣秀吉は能好きで知られ、自らもよく舞っている。その舞に唐織をもちいることがあった。下間少進の『能之留帳』によれば、文禄四年（一五九五）五月二十四日、伏見城で秀吉が演じた「邯鄲」に関して、「又太閤様召使候て如し前正面ニて見物、邯鄲出来申候由申上候へバ、邯鄲二めされ候唐織拝領」（法政大学能楽研究所編 能楽資料集成6『下間少進集』わんや書店 一九七六年 七三頁）とあり、少進が秀吉の舞を褒めたところ、少進は秀吉から「邯鄲」で身に着けた唐織を拝領した。「邯鄲」は中国の『枕中記』に取材した能である。人生に迷う青年盧生（シテ）が、邯鄲の宿で一生を夢みるという仙人の枕に臥すと、夢の中で帝王の位が譲られたことを告げられる。宿の寢室はそのまま玉座となり、廷臣が居並ぶ前で盧生は五十年の歡樂を舞つ。夢の舞が終わり起こされると、それはわずか粟の飯が炊ける間のことだった。盧生は五十年の栄華も一炊の夢と悟って帰っていく、という話し。『童舞抄』の「邯鄲」の項には「夢の舞。出立、風折（金）。長絹（腰帶）。大口。扇。又大口のうへに小袖をつぼおりてもする也。」（前掲『下間少進集』一五五頁）とあり、秀吉はこの小袖に唐織を用いたのであろう。唐織が夢中の栄華な舞を演出した。

いっぽう、『宗湛日記』によれば、天正十五年（一五八七）正月三日の大坂城大茶会で、秀吉は足が隠れるほど長い唐織の小袖を着たという（『茶道古典全集』第六巻 淡交社 一九七一年 一六四頁）。桃山時代には唐織が能装束だけではなく、公家の雅と武家の権力を象徴する織物として秀吉をはじめとする支配者層の衣服にも好まれた。



図 4-1 立涌に桐文様唐織打敷部分図 高台寺

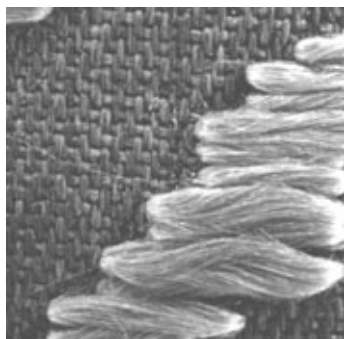


図 4-2 同 組織拡大図

枚、立涌に桐文様の唐織（図 4 1）には高台院が慶長十二年（一六〇七）に寄付をした旨の墨書が記されている。高台院が何らかの祈りを込めて自らの小袖を打敷に仕立て替えて奉納したのである。残りの唐織にも桐文が織り出されており、おそらくは高台院の小袖であったものである。

桃山時代の唐織をみると、組織は地が経三枚綾で、絵緯を半越（地緯二越ごとに絵緯一本）に入れて、縫取の浮織で文様を織り出している（図 4 2）。これは『広辞苑』の定義どおりである。この組織が公家装束の唐織物から受け継がれたことはこれまで述べてきたとおりである。もともと公家好みの唐織物は古神宝の遺例に見られるように三、四色の絵緯で飛び文様をあらわした上品な織物であった。しかし、唐織物が小袖に採用されて次第に華やかになっていったのであろう。桃山時代には華美を好む風潮のなかで、唐織は八色から十色にも及ぶ多彩な色使いになり、以前にも増して華麗さを増した。江戸時代には金糸も加わり、さらに豪華さを増すが、一般の小袖は染めの時代となり、織物が敬遠され、唐織は能の装束において独自の様式と美を生み出し、高貴な女性の美を演出した。

京都の高台寺には七枚の唐織の打敷が伝来している。高台寺は豊臣秀吉の夫人高台院が秀吉亡き後、自らの菩提所として慶長十一年（一六〇六）に建立した寺院である。そこに伝来する打敷の一